

実践③ 日置市立土橋小学校

1 はじめに

本校は、創立 125 周年を迎えた児童数 54 人、職員数 12 人、1 学年 1 学級の小規模校である。児童数の減少傾向に伴って、平成 14 年度から特認校制度を導入するとともに、併設する土橋幼稚園や近隣に位置する土橋中学校と連携した教育活動や、地域の方々との交流活動、絵画・作文等の表現力の育成など、特色ある学校づくりを推進している。読書活動の充実もその一つとして取り組んでいるところである。

2 児童の読書習慣の確立

(1) 朝読書の時間の設定と読み聞かせの実施



全校一斉に毎朝 10 分間、朝読書に取り組んでいる。また、この時間を活用して、児童の保護者を中心とする読み聞かせボランティアグループである「ひだまりの会」の皆さんが毎月 1 回読み聞かせを行っている。さらに、年 3 回の読書週間等の期間中は、全職員が読み聞かせを実施している。

このほか、昼休みには、月 2 回もしくは雨天時に

図書委員会の児童が読み聞かせや紙芝居をしたり、毎週月曜日の給食指導の時間には司書補が校内放送を使って朗読を実施したりするなど、読み聞かせの多様化を図っている。



(2) 読書週間等の実施

読書に関わる様々な活動を重点的に催して、図書に親しみ、読書好きな児童を育てることを目的として、学期 1 回の読書週間(旬間、月間)を設定している。

1 学期	2 学期	3 学期
読書週間	読書旬間	読書月間
・年度の読書目標冊数の決定 ・教職員のスクランブル読み聞かせ ・読書集会の実施(読み聞かせ、パネルシアター) 等	・読書標語募集 ・教職員のスクランブル読み聞かせ ・本の帯づくり、多読者表彰 ・おすすめの本紹介カードづくり 等	・読書しおり作り ・読書クイズ ・教職員のスクランブル読み聞かせ 等

(3) 親子読書「23が60しゅうかん(習慣・週間)」の実施

23日をはさむ1週間に60分間の親子読書を楽しむことを目標に、児童が保護者等の前で音読し、感想を出し合う時間として実施している。取組カードに保護者が簡単な感想を記入し、週間中、毎日担任に提出する取組を行っている。

3 児童の主体的な取組の推進

(1) 読書目標冊数やキャッチフレーズの設定

図書委員会の児童が主体となって全校の読書目標冊数や読書に関するキャッチフレーズを、その時々のお出来事や地域の特色等を踏まえながら設定している。平成 25 年度は「おいしいイチゴを育てよう～読書でたくさんの笑顔を増やそう～」とし、地



域の特産物であり、毎年実施しているイチゴ狩りにちなんで、20冊読むごとに1枚のイチゴの絵を貼り付けさせている。児童は、本を借りるたびにもらえるイチゴの絵を喜んで貼り付けている。イチゴの数が着実に増えていくことから、全校児童が多くの本を借りていることを実感することができ、更に本を借りようとする、よい動機付けになっている。

(2) 読書推進活動

そのほか、読書指導係と司書補の指導を受けながら、児童が年間を通して本に親しめるよう、本の貸出はもとより、読み聞かせ、お薦めの本の紹介、読書クイズパネルシアターや多読賞の表彰などを行うなど、児童の読書意欲の向上に向けて取り組んでいる。



4 魅力ある図書室づくりのための環境整備

(1) 図書室内の設営の工夫

季節に応じた図書室環境の整備を基本として図書室設営を進めている。行事や出来事等の時宜に応じた図書のコーナーや「先生方お薦めの本」コーナー、市推薦図書コーナー、市推薦図書50冊スタンプラリーのコーナー、親子読書コーナーなどの設置、新刊本の紹介、行事予定の掲示、読書標語の募集や表彰、掲示等に取り組み、児童の読書への関心を高めるような環境づくりに努めている。

(2) 廊下の設営の工夫

読書に関する広報物等を児童がよく通る廊下にも掲示することで、より多くの読書に関する情報にふれることができるようにしている。

(3) 選書会の開催

児童自らが選んだ本を図書室に置くことで、より一層図書への愛着をもってほしいと願い、昨年度から選書会を開き、児童一人一人に読みたい図書を選ばせて購入している。



5 成果と課題

児童の読書意欲が高まるとともに、読書習慣も確立しつつある。年間貸出冊数は、平成21年度以降4年連続で目標の10,000冊を超えている。しかし、発達の段階に応じた図書を読むとしない児童もいるなど、質的な読書指導の推進が課題となっている。

そこで、現在、学年部別の「おすすめの本リスト」を作成し、6年間分をファイルにして一人一人にもたせたり、「分類ビンゴカード」を作成、配布したりして、より多様な図書に親しむよう個別指導を進めている。

6 終わりに

毎朝、数冊の図書を入れたバッグを抱えて登校して来る児童の姿を見ると、これまでの取組が一定の成果を挙げていると実感する。今後も、学年の段階に即して量から質へシフトさせるような手立てを更に検討し、「本を読むことの楽しさを知り、自ら適切な本に手を伸ばす子どもの育成」を図りたい。